
素直になれなくて.....

神陸比呂和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素直になれなくて……

【Zマーク】

Z9205A

【作者名】

神陸比呂和

【あらすじ】

不器用な私は、思いを言葉にする事が下手だった。でも、そんな私を、彼は何時も優しく見守つていてくれたのに……

冬の太陽が私を包み込んでいる。氷雨で濡れたコートには小さな染みが出来き、身体の芯迄寒さが染み込み小刻に身体が震える。私は、古ぼけたバス停に佇み、白い溜め息を吐き乍凍えた手を温める。寒い冬の日、私の横には何時もあの人がいて、私を優しく包み込んでくれた。だけれど今は、凍えた私を温めてくれる人はいない。

『就職で、東京を離れる事になつたんだ』

大学を卒業すると同時に決まつた遠距離恋愛。何時もは、憎らしい程に自信に満ち溢れた澄んだ瞳が、不安と悲しみで陰つていた。同棲して二年。彼なりのプロポーズだつたのかも知れない。でも、私の口を突いて出た言葉は、彼の思いを叶える内容じや無かつた。

『知らない街で暮らすなんて、『冗談じやないわ』

そんな冷淡な一言。元々、私は素直な性格じやなくて、少し斜に構えた所があつたけれど、そんな私を、彼は優しい笑顔で何時も見守つてくれていた。何が有つても、私には優しかつた人。だけれど、その日の彼の反応は凄く寂しそうで、でも、そんな彼に対し、私は何時ものワガママな言葉を返すと

『待つてる……』

と短く云い残して、夜行バスに乗り込んだ。

『本当は一緒にいたいの！』

素直な気持を伝えたい。だけれど、意地つ張りで素直じや無い私は、本当の気持を伝える事をせず、バスは静かに出発してしまつた。

『ゴメンナサイ……』

二十時発N行き。彼を最後に見送つたバスの時間。見上げるバスの窓に写る彼の顔は泣いていた。私は、そんな彼を冷たい眼で見送つた。互いの思いが交錯するなか走り出したバス。その一時間後、バスは大雨でスリップし、中央分離帯にぶつかり大破してしまつた。警察の人からの説明では、彼は、携帯を操作してる時に事故に見舞

われ、即死したと云つ。そして、悲惨な事故から一年。事故巻き込まれる要因の一つで有るバス停に、私は立っている。

『素直に成れなくてゴメンナサイ』

心中でどれだけ謝罪をしても、記憶の中の彼は哀しい瞳のままで私をみている。言葉も届かない程に離れてしまった彼との距離は、もう、一度と彼の笑顔を見る事は出来無いと、暗に示している。私は、不器用な愛しかたしか出来なかつた自分を戒める様に、もう一度時刻表を撫でると、頬に冷たい物が流れて來た。溢れた感情が自然と涙と成り頬を濡らす中、私は、もう一度『ゴメンナサイ』と短く謝り、その場に泣き崩れた。彼の愛情に甘え、素直に成れなかつた私の言葉は彼に届いてるのだろうか。

「もうすぐね……」

腕時計の針は二十時を指し、ヘッドライトか近付いて来る中、私は、素直な気持を彼に伝える為に、滑り込んで来るヘッドライトに向かつて、静かにこの身を投げ出した。

了

(後書き)

お読み頂き有難うございました。久しぶりにショートショートを書きましたが、長編の方が楽だなあと実感しました。・・(^__^)・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9205a/>

素直になれなくて.....

2011年1月5日14時23分発行